

雲仙市文化財調査報告書 第15集

Kuriyama Shimokuriyama
栗山遺跡・下栗山遺跡

—八斗木地区県営基盤整備事業に伴う発掘調査報告—

2017

長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

雲仙市は、雲仙普賢岳の麓、豊かな大地と、光輝く海に囲まれた、自然と文化のあふれるふるさとです。この報告書は平成24年度～平成26年度に実施した、農業競争力強化基盤整備事業八斗木地区に伴う栗山遺跡・下栗山遺跡発掘調査の記録です。

栗山遺跡・下栗山遺跡は、島原半島の北側、雲仙普賢岳より続く丘陵上に所在し、遺跡東側を流れる土黒川の対岸には、旧石器時代～縄文時代の大規模遺跡である百花台遺跡群があります。

今回の調査では、旧石器時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に旧石器時代の石器群が多く見つかり、古代人が黒曜石を打ち割って石器を作っていた様子が、石器の接合関係から見て取れます。今報告では、出土石器の科学的な分析作業を行い、石器石材の原産地が多く判明しました。その多くは、佐賀県嬉野市や伊万里市、長崎県西彼半島の黒曜石でしたが、遠くは、鹿児島県伊佐市から運ばれてきたものもあり、当時の人々の生き生きと生活する姿が想像できます。

この調査報告書が文化財の保護・保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する関心と理解をいただく資料になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、ご指導、ご協力いただきました、地元自治会の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方、ならびに長崎県教育委員会学芸文化課、長崎県埋蔵文化財センターの皆様衷心から感謝申し上げます、発行のことばといたします。

平成29年3月24日

雲仙市教育委員会

教育長 山 野 義 一

例 言

1. 本報告は平成24年度～平成26年度に実施した八斗木地区県営園場整備事業に伴う長崎県雲仙市国見町に所在する粟山遺跡・下粟山遺跡の緊急発掘調査の報告である。

2. 調査は雲仙市教育委員会が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

平成24年度

2012年4月25日～2013年3月29日 970㎡

平成25年度

2013年4月15日～2014年3月31日 2,700㎡

平成26年度

2014年4月1日～2015年3月31日 4,500㎡

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 雲仙市教育委員会

教育長 塩田 貞佑（～平成25年2月）

教育長 山野 義一（平成25年3月～）

教育次長 山野 義一（～平成25年2月）

教育次長 岸川 孝（平成25年4月～）

教育次長 山本 松一（平成26年4月～）

生涯学習課長 村山 岩穂（～平成25年3月）

生涯学習課長 清水 清文（～平成26年3月）

生涯学習課長 稲本 克彦（～平成27年3月）

生涯学習課長 松橋 秀明（平成27年4月～）

文化財班班長 田中 卓郎（～平成25年3月）

文化財班班長 柴崎 孝光（平成25年4月～）

文化財班主事 富永 康史（～平成26年3月）

文化財班主事 横尾 幸治（平成26年4月～）

文化財班主事 林田 英明（平成28年4月～）

調査担当

文化財班参事補 辻田 直人

文化財班主査 村子 晴奈（平成28年4月～）

文化財調査員

村子 晴奈（～平成28年3月）

竹田 将仁（～平成25年3月）

青木 翔太郎（平成24年4月～平成26年3月）

堀井 香七（平成25年4月～平成26年3月）

林田 好子（平成26年4月～平成27年3月）

松崎 光伸（平成27年4月～）

竹本 成美（平成27年4月～平成28年3月）

今西 亮太（平成28年4月～）

文化財整理員

早稲田 一美・柳原 亜矢子・本田 円香（～平成

28年3月）・三浦 幸菜（平成28年4月～）・吉

田 光孝（平成28年10月～）

4. 現地での遺構・遺物の実測は林 繁夫・福田 次郎・竹田・青木・堀井・林田・辻田・村子が行い、遺物の実測は竹田・青木・堀井・林田・松崎・竹本・早稲田・柳原・本田・三浦・辻田・村子が行い、一部は埋蔵文化財サポートシステム長崎支店及び九州文化財研究所長崎営業所に委託した。トレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は早稲田・柳原・本田・村子・辻田が行い、写真は現地調査を竹田・青木・堀井・林田・辻田・村子が、遺物写真は早稲田・柳原・本田・辻田・村子が行った。

5. 石器の接合作業は本田・柳原が行い、接合石器実測の一部は埋蔵文化財サポートシステム長崎支店及び九州文化財研究所長崎営業所に委託した。また、接合石器のうち一部の資料は、長崎県埋蔵文化財センターにて三次元計測を行い、あわせて3Dプリンターにてレプリカを作成した。

6. 第4章自然化学分析については、第3節Ⅲ及び第4節については樹古環境研究所に、それ以外は樹火山灰考古学研究所（Na000571・000645）に委託した。第5節については、長崎県埋蔵文化財センターにおいて辻田が分析した結果を報告している。

7. 空中写真撮影業務は株式会社サイバーク九州に委託した。

8. 本遺跡の遺物及び写真・図等は雲仙市歴史資料館国見展示館で保管している。

9. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

10. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。下川達彌（活水女子大学）、早田勉（樹火山灰考古学研究所）、萩原博文、川道 寛・片多雅樹・今西亮太（長崎県埋蔵文化財センター）、杉原敏之（九州歴史資料館）、九州旧石器文化研究会、福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会（順不同）

11. 本書の執筆・編集は辻田直人・村子晴奈による。

目 次

巻頭図版	
発行にあたって	
例 言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

第1章 調査の経緯	1p
第1節 発掘調査にいたる経緯	
第2節 発掘調査の方法及び経過	
第3節 遺跡の地理的・地形的環境	
第2章 基本土層	5p
第1節 百花台遺跡群との対比	
第3章 検出された遺構と遺物	8p
第1節 旧石器時代の遺物	
第2節 縄文時代の遺構・遺物	
第3節 おとし穴状遺構	
第4節 掘立柱建物跡	
第4章 自然科学分析	99p
第1節 火山灰分析	
第2節 植物珪酸体分析	
第3節 放射性炭素年代測定結果	
第4節 炭素・窒素安定同位体比分析(植生分析)	
第5節 蛍光X線分析による石器石材産地同定	
第5章 まとめ	170p
第1節 総括	
第2節 まとめ	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図(1/20,000)	
第2図	遺跡周辺地形(1/10,000)	2
第3図	調査区配置図(1/4,000)	4
第4図	旧石器時代遺物出土状況(1/2000)	6
第5図	栗山遺跡・下栗山遺跡と百花台遺跡群・土黒川流域遺跡群との対比	7
第6図	12区・13区・14区遺物出土状況①(1/150)	8
第7図	12区・13区・14区遺物出土状況②(1/150)	9
第8図	12区・13区出土遺物(2/3)	10
第9図	9区・26区遺物出土状況①(1/200)	12
第10図	9区・26区遺物出土状況②-1(1/100)	13
第11図	9区・26区遺物出土状況②-2(1/100)	14
第12図	9区・26区遺物出土状況②-3(1/100)	15
第13図	9区・26区遺物出土状況③-1(1/100)	17
第14図	9区・26区遺物出土状況③-2(1/100)	18
第15図	9区・26区遺物出土状況③-3(1/100)	19
第16図	9区・11区・25区・26区出土遺物①(2/3)	20
第17図	9区・11区・25区・26区出土遺物②(2/3)	23
第18図	9区・11区・25区・26区出土遺物③(2/3)	25
第19図	9区・11区・25区・26区出土遺物④接合資料①(2/3)	27
第20図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑤接合資料①(2/3)	28
第21図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑥接合資料②(2/3)	32
第22図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑦接合資料③(2/3)	34
第23図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑧接合資料④(2/3)	35
第24図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑨接合資料⑤(2/3)	36
第25図	9区・11区・25区・26区出土遺物⑩(2/3)	37
第26図	5区・27区遺物出土状況①(1/100)	39
第27図	5区・27区遺物出土状況②(1/100)	40
第28図	5区・27区出土遺物①(2/3)	41
第29図	5区・27区出土遺物②(2/3)	43
第30図	5区・27区出土遺物③(2/3)	44
第31図	5区・27区出土遺物④接合資料⑥(2/3)	46
第32図	5区・27区出土遺物⑤接合資料⑥(2/3)	47
第33図	5区・27区出土遺物⑥接合資料⑥(2/3)	48
第34図	5区・27区出土遺物⑦接合資料⑥(2/3)	49
第35図	5区・27区出土遺物⑧接合資料⑥(2/3)	50
第36図	16区・17区遺物出土状況①(1/200)	54
第37図	16区・17区遺物出土状況②(1/150)	55
第38図	16区・17区出土遺物(2/3)	56
第39図	29区・30区・32区遺物出土状況①(1/500)	58
第40図	29区・30区・32区遺物出土状況②-1(1/250)	60
第41図	29区・30区・32区遺物出土状況②-2(1/250)	61
第42図	29区・30区・32区出土遺物①(2/3)	62
第43図	29区・30区・32区出土遺物②(2/3)	63

第44図	29区・30区・32区出土遺物③(2/3)	64
第45図	2区遺物出土状況①(1/100)	66
第46図	2区遺物出土状況②(1/100)	67
第47図	3区遺物出土状況①(1/100)	68
第48図	3区遺物出土状況②(1/100)	69
第49図	2区・3区・4区出土遺物(2/3)	70
第50図	28区出土遺物(2/3)	71
第51図	29区SK-39土坑配置図(1/120)	78
第52図	29区SK-39土坑検出状況(1/20)	78
第53図	29区SK-39出土遺物(1/3)	79
第54図	3区SD-3検出状況(1/120)・断面図(1/80)	80
第55図	12区～22区出土土器①(縄文時代晩期～弥生時代早期)(1/3)	81
第56図	12区～22区出土土器②(縄文時代晩期～弥生時代早期)(1/3)	83
第57図	おとし穴状遺構配置図(1/3,000)	87
第58図	3区SK-3おとし穴状遺構検出状況(1/30)	88
第59図	13区SK-17おとし穴状遺構配置図(1/400)・検出状況(1/30)	89
第60図	25・27・28区おとし穴状遺構配置図(1/400)・検出状況(1/60)	90
第61図	25区SK-20おとし穴状遺構検出状況(1/30)	91
第62図	25区SK-21おとし穴状遺構検出状況(1/30)	92
第63図	27区SK-29おとし穴状遺構検出状況(1/30)	93
第64図	28区SK-35おとし穴状遺構検出状況(1/30)	94
第65図	28区SK-36おとし穴状遺構検出状況(1/30)	94
第66図	28区SK-38おとし穴状遺構検出状況(1/30)	95
第67図	14・15区掘立柱建物跡配置図(1/200)・検出状況(1/40)	96
第68図	栗山遺跡・下栗山遺跡出土土器編年図(1/6・1/3)	170

表 目 次

第1表	旧石器時代遺物計測表(実測図掲載遺物)	72～77
第2表	出土土器観察表	85～86
第3表	おとし穴状遺構計測表	95
第4表	旧石器時代遺物計測表(出土遺物全体)	134～169

図 版 目 次

中表紙図版(カラー)

巻頭図版①(カラー)	雲仙普賢岳山頂より有明海を望む	有明海より雲仙普賢岳を仰ぐ
巻頭図版②(カラー)	栗山遺跡調査風景(25区～32区)	栗山遺跡26区調査風景
巻頭図版③(カラー)	栗山遺跡26区出土土器(接合資料)(ほぼ2/3)	
巻頭図版④(カラー)	栗山遺跡27区出土土器(接合資料)(ほぼ2/3)	
巻頭図版⑤(カラー)	栗山遺跡27区出土土器(接合資料)(ほぼ2/3)	

88頁 13区SK-17おとし穴状遺構土層堆積状況(東側)

97頁 14・15区掘立柱建物跡充堀状況 14・15区掘立柱建物跡Pit46半裁状況

図版 1

遺跡上空写真(昭和35年国土地理院)

図版 2

遺跡近景(北より)

遺跡遠景(南より)

下栗山遺跡 1区~4区

栗山遺跡 5区~11区

栗山遺跡 12区~22区

下栗山遺跡 29区~32区

図版 3

基盤整備の進む遺跡

基盤整備の進む遺跡と雲仙普賢岳

栗山地区 26区遺物検出状況

図版 4

29区 SK-39 検出

29区 SK-39 掘り下げ

29区 SK-39 出土遺物

29区 SK-39 完掘

29区 SK-39 調査風景

3区 SD-3 完掘

3区 SD-3 南壁土層

3区 SD-3 調査風景

図版 5

3区 SK-3 検出

3区 SK-3 断面

3区 SK-17 掘り下げ

3区 SK-17 調査風景

3区 SK-20 半裁

3区 SK-20 スライス①-④'

3区 SK-21 半裁

3区 SK-21 スライス③-⑥'

図版 6

27区 SK-29 半裁

27区 SK-29 完掘

28区 SK-35 半裁

28区 SK-35 完掘

28区 SK-36 半裁

28区 SK-36 完掘

28区 SK-38 半裁

28区 SK-38 完掘

図版 7

調査前の風景

調査前の風景(八斗木ねぎ)

事前の草刈

調査区の設定

2区調査風景

2区土層堆積

3区調査風景

3区土層堆積

図版 8

9区調査風景

9区土層堆積

12区調査風景

12区VI層出土石器

12区VII層出土石器

12区VII層出土石器

12区火山灰分析

12区火山灰分析

図版 9

12区土層堆積

12区完掘状況

12区完掘状況

12区完掘状況

13区・14区調査風景

14区土層検出

16区・17区調査風景

16区・17区調査風景

図版 10

16区・17区調査風景

16区・17区調査風景

16区・17区調査風景

16区・17区VI層出土石器

16区・17区VI層出土石器

18区晩期土器出土状況

25区調査風景

26区調査風景

図版 11

26区調査風景

26 区調査風景
26 区調査風景
26 区調査風景
26 区石器出土状況
26 区石器出土状況
26 区石器出土状況
26 区石器出土状況

図版 12

26 区完掘
26 区完掘
26 区土層尖削風景
27 区調査風景
27 区調査風景
27 区調査風景
27 区石器集中部分
27 区石器集中部分

図版 13

27 区VI層出土石器
27 区完掘
27 区石器集中部分の礎
27 区石器集中部分の礎
27 区土層堆積
28 区調査風景
29 区・30 区調査風景
29 区調査風景

図版 14

29 区調査風景
29 区・30 区調査風景
29 区調査風景
29 区石器出土状況
29 区VI層出土石器
32 区調査風景
32 区土層堆積
暑さ対策の遮光ネット

図版 15

出土遺物写真 (第 53 図・第 55 図 2~17)

図版 16

出土遺物写真 (第 55 図 18~23・第 56 図)

図版 17

出土遺物写真 (第 8 図・第 16 図)

図版 18

出土遺物写真 (第 17 図・第 18 図)

図版 19

出土遺物写真 (第 19 図・第 20 図)

図版 20

出土遺物写真 (第 21 図)

図版 21

出土遺物写真 (第 22 図・第 23 図)

図版 22

出土遺物写真 (第 24 図・第 25 図)

図版 23

出土遺物写真 (第 28 図・第 29 図 74~78)

図版 24

出土遺物写真 (第 29 図 79・第 30 図)

図版 25

出土遺物写真 (第 31 図・第 32 図)

図版 26

出土遺物写真 (第 33 図・第 34 図 88-4)

図版 27

出土遺物写真 (第 34 図 88-5~6・第 35 図)

図版 28

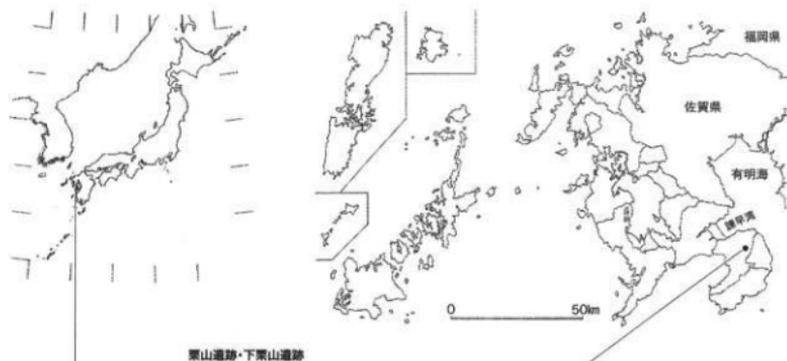
出土遺物写真 (第 38 図・第 42 図)

図版 29

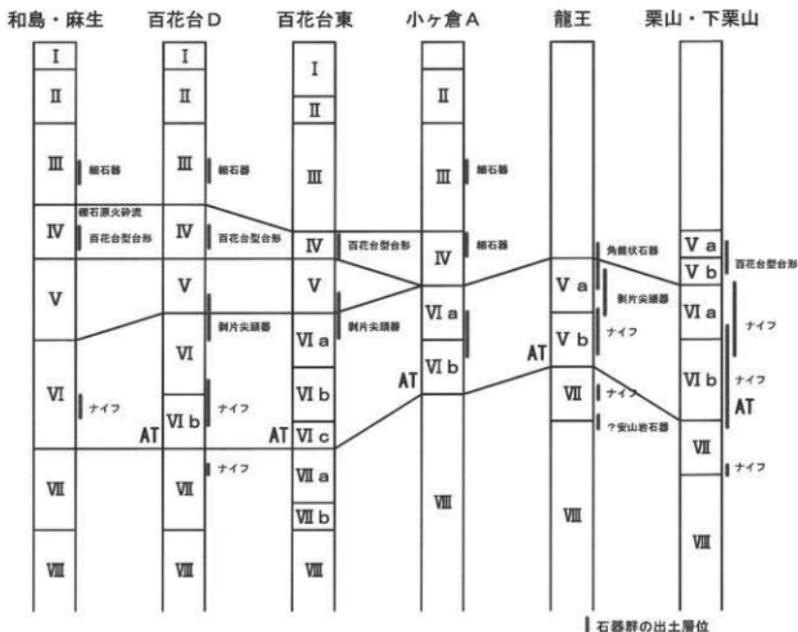
出土遺物写真 (第 43 図・第 44 図)

図版 30

出土遺物写真 (第 49 図・第 50 図)

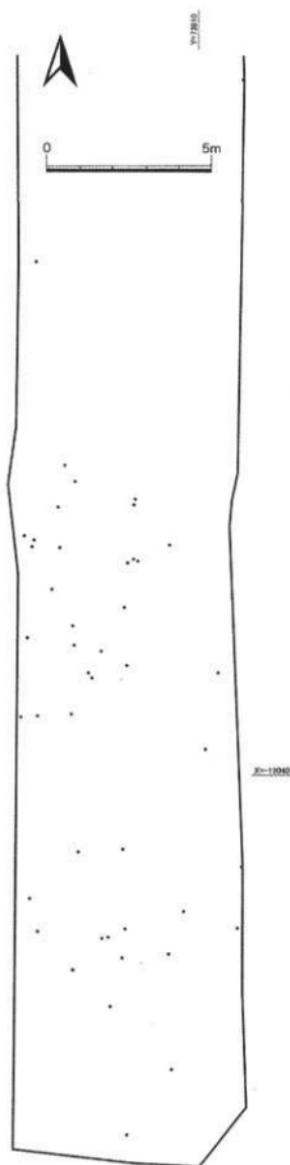


第1図 遺跡位置図 (1/20,000)



第5図 栗山遺跡・下栗山遺跡と百花台遺跡群・土黒川流域遺跡群との対比

栗山遺跡・下栗山遺跡や百花台遺跡群に、共通する第VI層から第VII層にかけて概観する。第VI層は非常に硬質の土層で、クラックが発達する。各遺跡で2~3層に細分されており、いずれの場合も最下部がA T火山灰降灰層準となっている。各遺跡で土層の厚さにばらつきはあるものの、ナイフ形石器から剥片尖頭器の時期までの石器群が検出される。厚みのある遺跡では、第VI層内で出土物の検出レベルが異なっており、栗山遺跡26区のナイフ形石器群の場合は、第VI層検出時にはまったく検出されないが、第VI b層をピークに、その前後の土層に遺物が分布する。対して、栗山遺跡16区・17区では、第VI層検出面に近いレベルから遺物が検出し始める。また、試掘調査時には、第VI層に突き刺さるように剥片尖頭器が検出されており、雲仙市国見町十園遺跡でも同様の調査事例がある。百花台東でも、第VI層の上部からの出土が見られる。堆積状況次第では、第VI層中に少なくとも3時期の石器群を分離することが可能と考えられる。第VII層はいわゆるA T下位の暗色帯である。龍王遺跡では、礫面の状況から腰岳産の黒曜石を素材としたナイフ形石器群が検出されている。百花台遺跡でも少量ではあるが検出されている。栗山遺跡12区では、2点であるが第VII層と第VIII層の境目に張り付くように検出されており、島原半島でも第VII層中に石器群の存在することは確実である。しかしながら、第VI層のように同一層内での石器群の分離は今のところ見出せていない。第VIII層は黄色粘質土の基盤層である。今のところ石器の検出はみられない。阿蘇4火砕流起源の小形の亜角礫黒曜石が含まれているが、旧石器時代では石器石材としての利用は見られない。



第6図
12区・13区・14区 遺物出土状況①(1/150)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺物

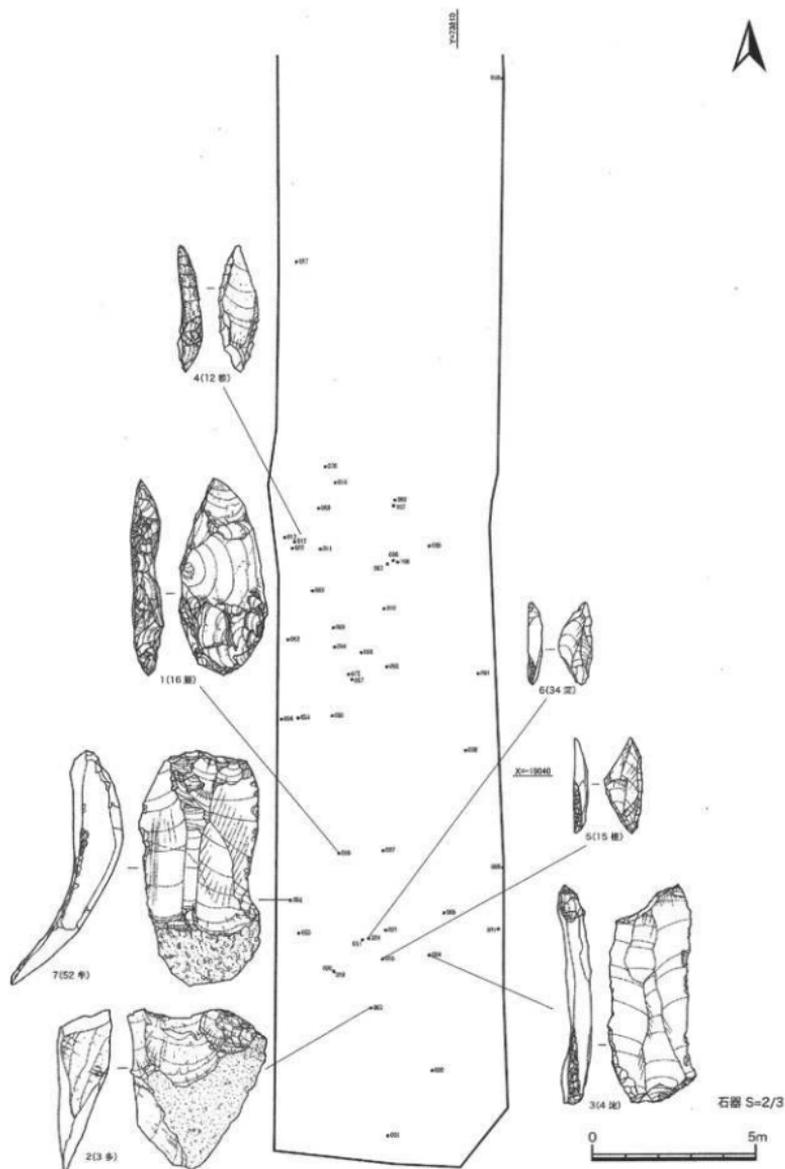
栗山遺跡・下栗山遺跡からは第VI層を中心として多くの石器が検出されている。第VI層は下部にAT火山灰が検出されており、下半部にAT火山灰降灰期が予想される。検出された石器群を概観するとおおむねAT火山灰降灰後の石器群と理解されるが、数点ではあるが、AT下位の石器と考えられるものもある。以下、各地点の石器群の分布状況を概観するが、今報告では、石器石材の分析等を行っており、実測図等の表記方法について説明を行っておく。

石器実測図に付している1から始まる番号は、石器実測図の掲載順によるもので、石器計測表では一番左の欄の数字である。その横の括弧内の数字は、石器の三次元計測時の番号で、石器計測表では左から4番目の欄「遺物番号」と対応する。

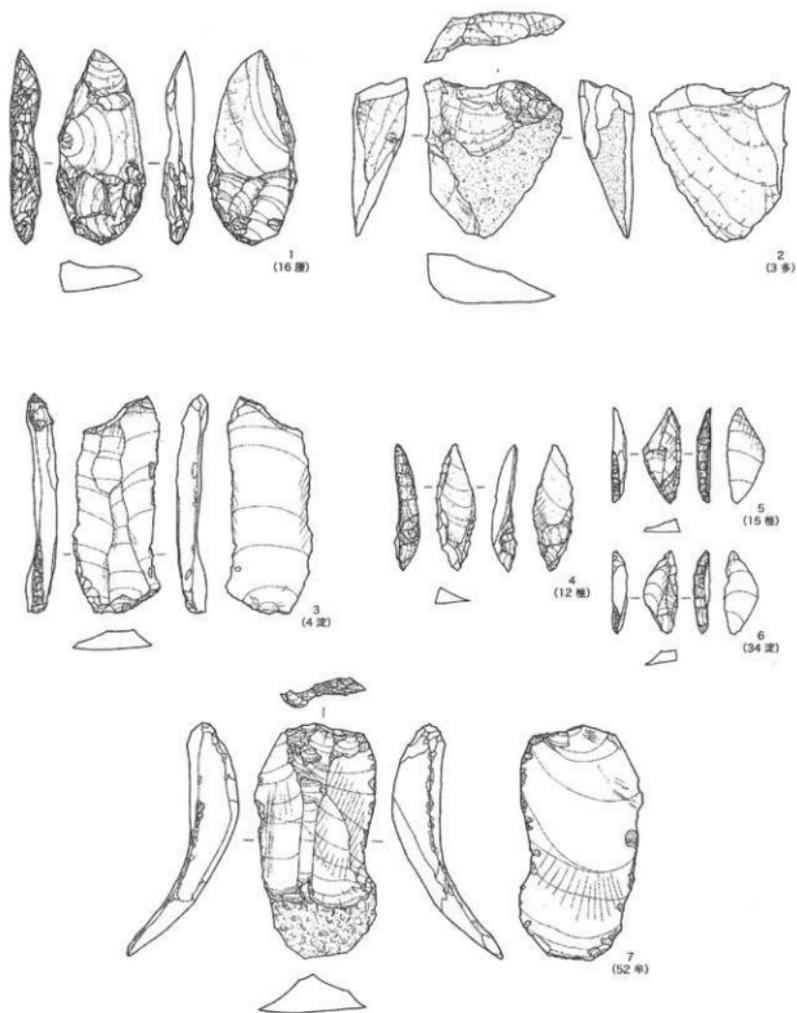
「遺物番号」の右には分析により石材の産地が判明したものについては、産地の略号（第4章第5節参照）を付しており、表記が無いものは、産地が分からなかったものである。また、石器の分布図には「遺物番号」をドットの横に付している。

— 12区・13区・14区 —

42点の石器が検出されており、7点を図示している。まばらな検出であり、土層的にもかなり上下差があり、全ての石器が同一時期のものとは考えられない。しかしながら、1、2について第VII層のAT下位の暗色帯と第VIII層の境目からの出土であり、AT下位の石器と考えられる。1は腰岳系の黒曜石製、2は多久の安山岩製である。



第7图 12区·13区·14区 遺物出土状況②(1/150)



第8图 12区·13区出土遗物(2/3)

一出土石器一

1・2は第Ⅶ層と第Ⅷ層の境目で検出された石器である。いわゆる第2暗色帯最下部の検出であり、A T火山灰降灰前の石器と考えられる。

ナイフ形石器

1 (16) は腰岳系黒曜石で、厚手で幅広の剥片を素材とするナイフ形石器である。主要剥離面側は下端から平坦剥離が施され、背面側には右側縁からの平坦剥離が施されており、厚さを減じるような加工となっている。その後、左側縁に主要剥離面側からブランディング加工が行われ、さらに後、左側縁から、背面中央に大きな平坦剥離が施されている。

加工痕のある石器

2 (3) は多久安山岩製の加工痕のある剥片である。打面は単剥離面打面。背面には礫面が残る。左側面の剥離は打点がないため、剥片剥離時のハジケか。右側面上部は背面に平坦剥離が施されている。

3～7は第Ⅵ層より上位の検出で、A T降灰後の石器群である。

ナイフ形石器

3 (4) は淀姫系黒曜石のナイフ形石器である。連続する縦長剥片を剥離する石核から剥離された縦長剥片を素材とする。左側縁の基部側に主要剥離面側からブランディングを施し、上部にも同じくブランディングを施すが、中央部が凹む形状となっている。上部主要剥離面側の右側縁からの剥離は上部のブランディングの打点部分を切り取るような剥離となっている。ガジリにより、右側縁上部からの剥離の打面はなくなっているが、影器状の加工の痕とも考えられる。素材剥片の打面は複剥離面打面。素材剥片の形状をほとんど残している。

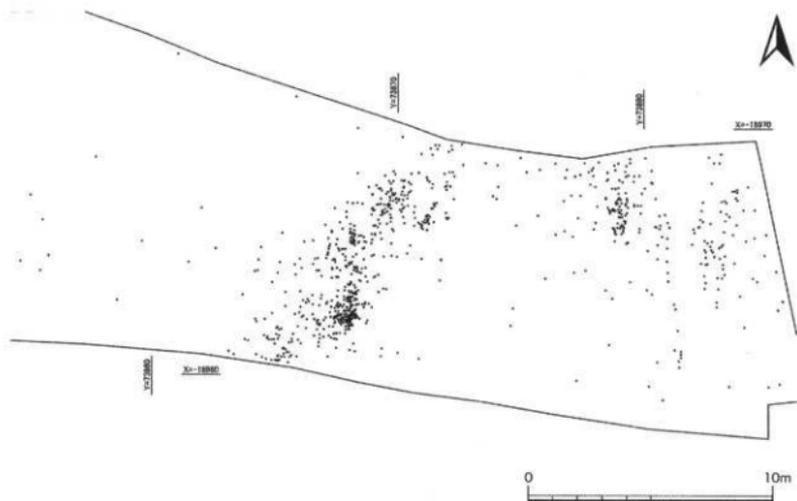
4 (12) は椎葉川産黒曜石のナイフ形石器である。やや幅広の剥片を素材とする。左側面は主要剥離面側からブランディング加工を施し、一部背面側からも行われている。右側縁は下半にブランディング加工を施し、上半部を刃部とする。主要剥離面側基部には、右側縁より平坦剥離が施されている。ブランディング等の調整剥離は非常にしっかりしている。

5 (15) は椎葉川産黒曜石のナイフ形石器である。薄い幅広の剥片を素材とする。右側縁全体と左側縁の下半に主要剥離面側からのブランディング加工が施されている。背面の基部には、左側縁からの平坦剥離が見られる。

6 (34) は淀姫系黒曜石のナイフ形石器である。小型の剥片を素材とする。右側縁は主要剥離面側からブランディング加工を施し、左側縁は下半に主要剥離面側から微細な加工により基部の形を整えている。

加工痕のある石器

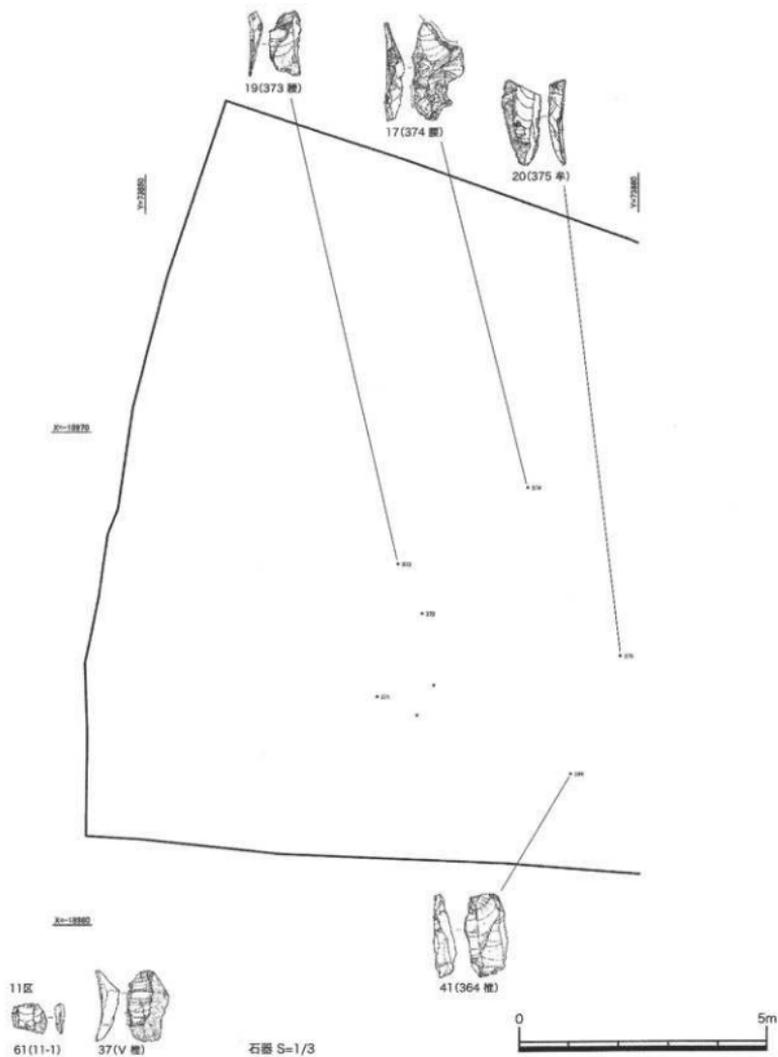
7 (52) は牟田の黒曜石製の加工痕のある剥片である。背面下部に礫面が残っており、円礫と考えられる。背面側は連続する縦長剥片剥離しているようにも見えるが、礫面を剥離した痕と考えられる。打面はかなりつぶれてしまっているが背面側からの細かい調整が行われていたようだ。下端は蝶番剥離となっている。両側縁は背面・主要剥離面ともに微細な剥離が見られ、使用によるものと思われる。左側縁中央付近にはノッチ状の加工が施されている。



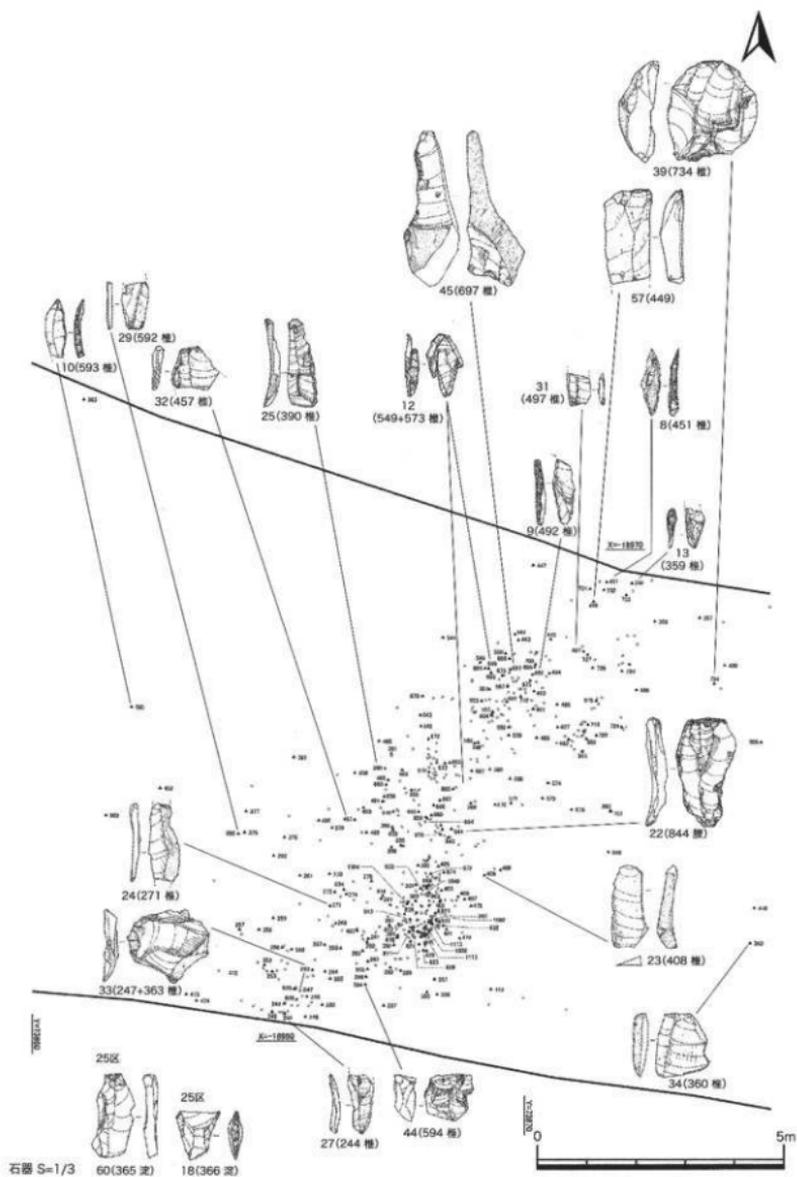
第9図 9区・26区 遺物出土状況①(1/200)

—9区・25区・26区—

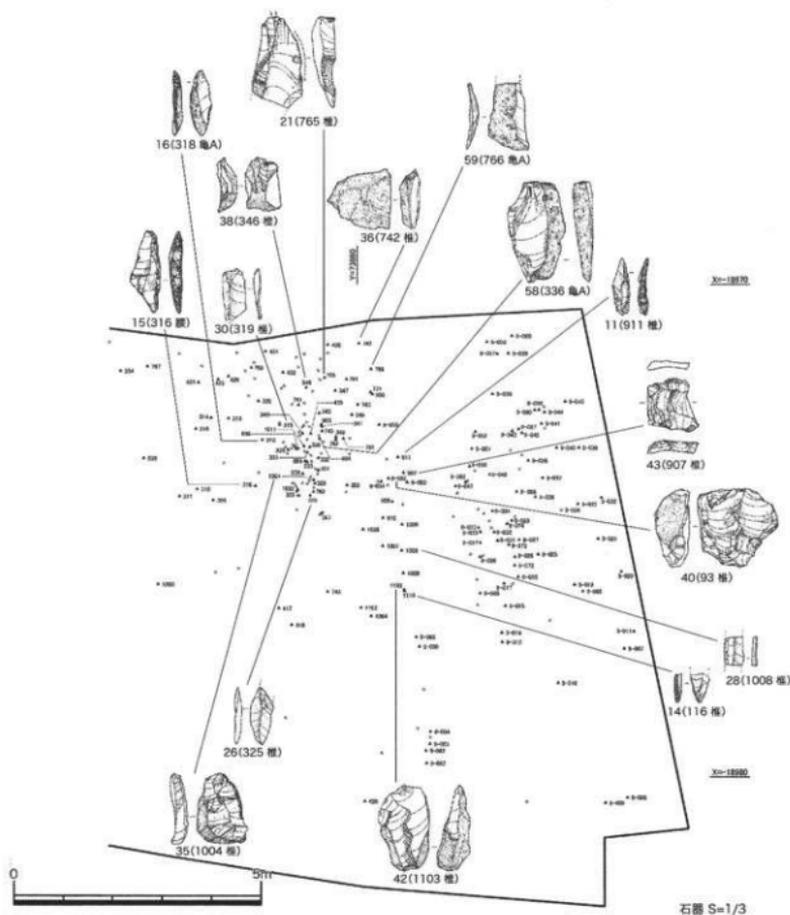
877点の石器が検出されており、76点を図示している。石器の分布図については、第10図～第12図にチップ以外の石器に遺物番号を付している。第13図から第15図にはチップとした石器に番号を付している。チップとそれ以外の石器の明確な線引きはないが、ナンバリングできないほど細かい剥片やそれに類する小さな剥片と理解願いたい。石器群は第VI層中位頃より検出され始め、第VII層まで落ち込んでいると考えられる石器も見られる。出土層位が異なるものの、平面分布のまとまりや石材分析の結果などからそのほとんどが、ほぼ一括の石器群と考えられる。時期的にはAT降灰期に近い時期が想定される。石器群の内容から、縦長剥片剥離に特化した様子が何え、また、石材分析の結果877点中805点が椎葉川産黒曜石製の石器群ということが判明している。石器の分布はいくつかの集中地点がありながら、その集中地点が半円状に連なっており、本来は調査区外にも分布が続いているものと考えられる。このことは、石器の接合状況からも見て取れ、15mほど離れた25区の石器が接合しており、25区の石器についても同一の石器群の可能性が有る。25区からは3点の石器が検出され、接合資料①に接合する椎葉川産黒曜石製石器1点、淀姫系黒曜石製の台形石器(18)と縦長剥片(60)の各1点である。877点の中で淀姫系黒曜石はこの2点のみであり、同一の石器群が確認は持たないが、今報告では同じ石器群と考えている。接合資料も多く見出されており、主な接合資料の実測図も掲載している。第5章では接合資料①～⑤の接合状況を図示している。



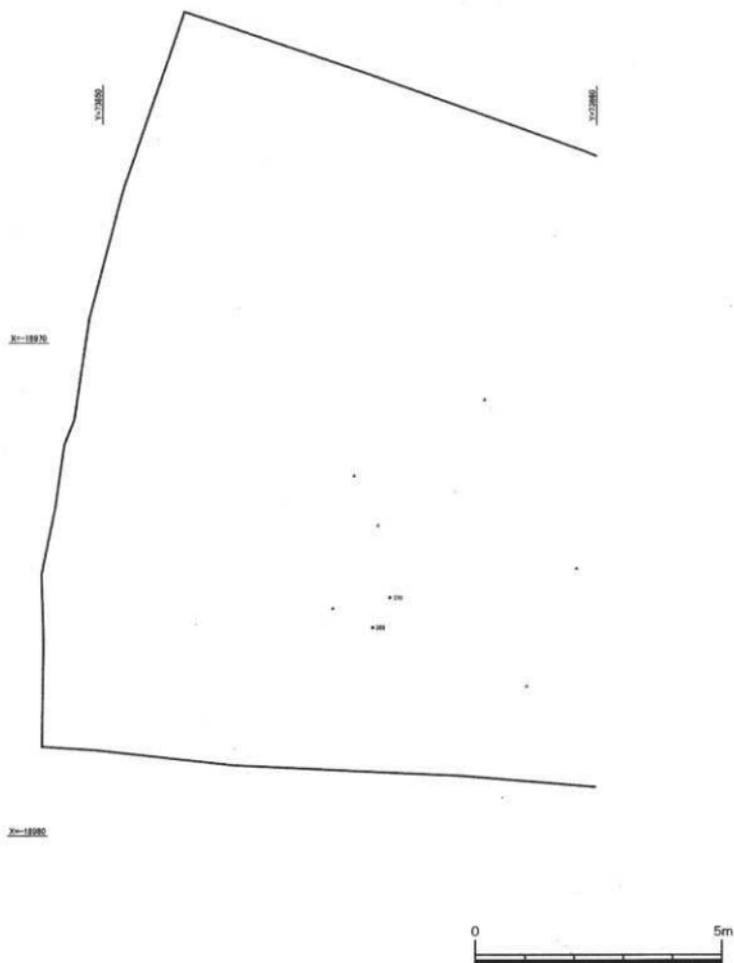
第 10 图 9 区・26 区 遺物出土状況②-1 (1/100)



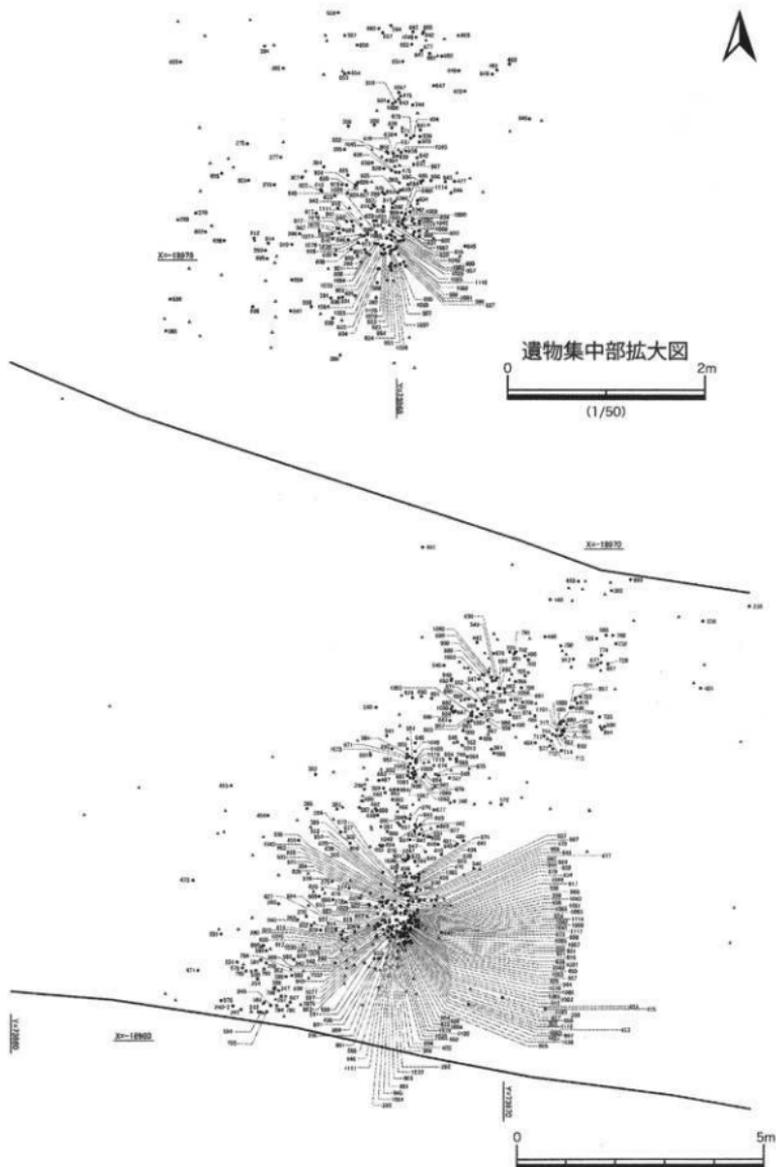
第 11 图 9 区・26 区 遺物出土状況②-2 (1/100)



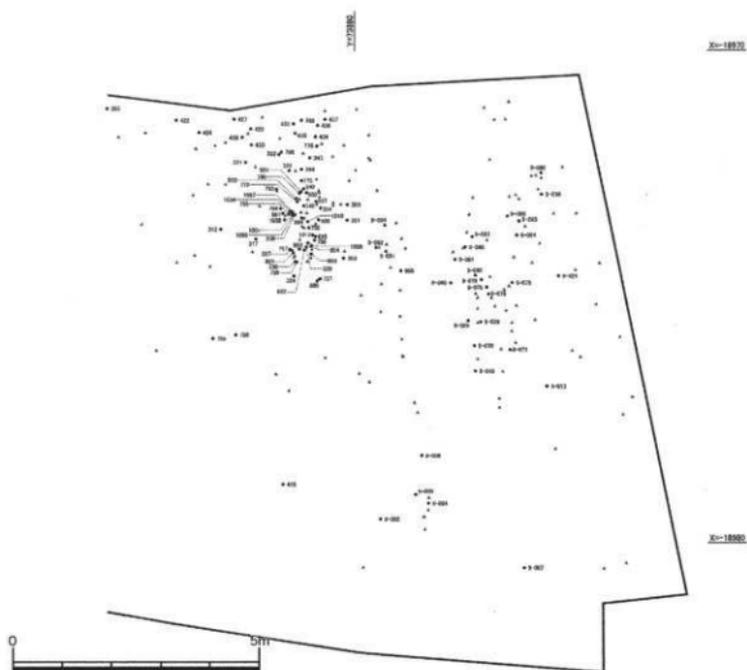
第 12 图 9 区・26 区 遺物出土状況②-3 (1/100)



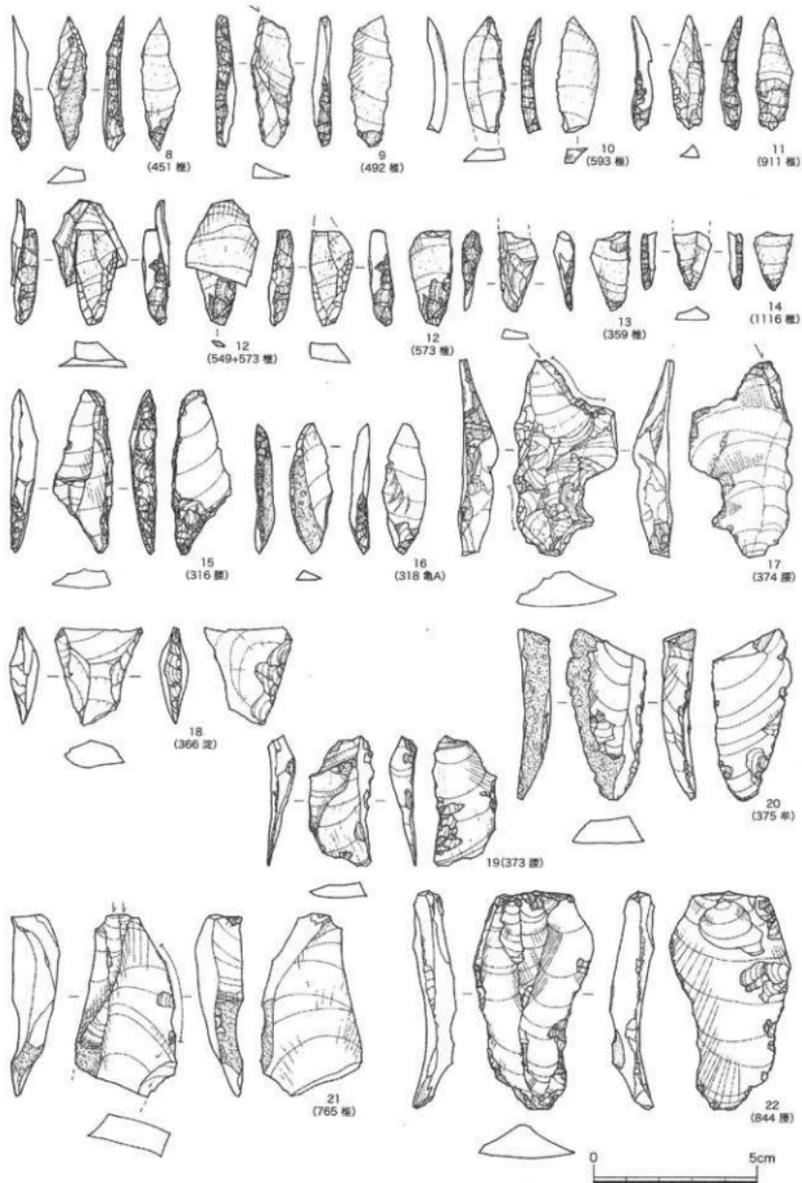
第 13 图 9 区・26 区 遗物出土状况③-1 (1/100)



第 14 図 9 区・26 区 遺物出土状況③-2 (1/100)



第15図 9区・26区 遺物出土状況③-3 (1/100)



第16图 9区·11区·25区·26区出土遗物①(2/3)

一出土石器

ナイフ形石器

8 (451) は椎葉川産黒曜石製の2側縁加工のナイフ形石器である。右側縁は主要剥離面側からブランディング加工を施し、先端部には背面側からも施される。左側縁は主要剥離面側からブランディング加工を施し、下端には背面側からも施される。基部の主要剥離面側には、左側縁のブランディング加工の後、左側縁側から平坦剥離が施される。背面中央には稜面が残る。

9 (492) は椎葉川産黒曜石製の2側縁加工のナイフ形石器である。先端部は影器状の加工が施され、先端部背面側のエッジ部分には使用によるものか、微細な剥離痕が見られる。素材剥片は打面を固定して縦長剥片剥離を行った石核から剥離されたもの。背面の剥離には、末端に近い部分が、波打つように厚くなっている部分があり、凹凸が見られる。左側縁は主要剥離面側から全体にブランディング加工が施され、先端部分は背面側からも行われる。右側縁は下半部分にブランディング加工が施され、下端部分は背面側から行われている。主要剥離面基部には右側縁のブランディング加工後に、右側縁から平坦剥離を行っている。

10 (593) は椎葉川産黒曜石製のナイフ形石器である。素材剥片は、連続する縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたもので、打面を固定して剥離している様子が見られる。右側縁に主要剥離面側からブランディング加工が施されている。下端は右側縁の加工後に折れているようだ。

11 (911) は椎葉川産黒曜石製の2側縁加工のナイフ形石器である。右側縁は全体に主要剥離面側からのブランディングが施され、その後に基部側に平坦剥離が施されている。左側縁は下半部に調整が施されており、上半部が刃部となる。背面の中央に見られる剥離は、階段状剥離となっており、段差がついている。

12 (549+573) は椎葉川産黒曜石製のナイフ形石器と剥片の接合資料である。ナイフ形石器も剥片も打点の方向は同じである。剥片は薄く、剥片剥離の際に中央部分から折れているようだ。ナイフ形石器の素材剥片剥離後、左方向からの調整を行った後、剥離されている。

12 (573) は下方からの連続する剥片剥離を行う石核から剥離された、縦長剥片を素材とする、2側縁加工のナイフ形石器である。先端は発掘時のガジリで欠損する。左側縁は主要剥離面側からのブランディング加工を施し、右側縁は下半にブランディング加工を施し、上半部を刃部としている。主要剥離面側の基部は、左側縁からの平坦剥離が施されている。下端には素材剥片の打面が見られる。

13 (359) は上半部を当時の折れで大きく欠損する、椎葉川産黒曜石製の2側縁加工のナイフ形石器である。左側縁は、主要剥離面側からブランディング加工を施し、上半部では、背面側からも加工が見られる。右側縁は細かい加工により調整されている。

14 (1116) は椎葉川産黒曜石製のナイフ形石器である。上半部を大きく欠損する。連続する縦長剥片剥離を行う石器から剥離されている剥片を素材とする。主要剥離面側の基部には、右側縁から細かい平坦剥離が施される。

15 (316) は腰岳系黒曜石製の2側縁加工のナイフ形石器である。厚手の縦長剥片を素材とし、右側縁は主要剥離面側からブランディング加工を施し、基部側は背面側からも行われている。左側縁は下部に主要剥離面側からブランディング加工を施し、基部を尖らせるような形状となっている。両側縁の加工の後、主要剥離面側の基部に両側縁から平坦剥離が施される。先端部分は当時の折れにより欠損しており、背面でもっとも大きな剥離痕は本来のナイフ形石器の刃部まで剥離した格好となっており、元々はかなり長く、優美なナイフ形石器であったことが予想される。

16 (318) は亀岳系黒曜石A群製の2側縁加工のナイフ形石器で、背面には稜面が残る。左側縁の先

端部は、背面側、主要剥離面側両方からのブランディング加工が施されている。中央より下半は、微細な剥離による調整にとどまる。右側縁は、下半に主要剥離面側からのブランディング加工が施され、上半部が刃部となる。主要剥離面側の基部には左側縁からの平坦剥離が行われている。27区の石材と同様で、産地不明の亀岳系黒曜石A群製だが、礫面の見た目や剥離面の質感は若干異なっている。

複合石器

17 (374) は複合石器である。厚手の剥片を素材とした石器で、影器・ノッチ・スクレイパー・錐等の複合石器。先端部には、左側縁にブランディング状の加工を施した後に、右側縁に極状剥離により影刀面を作出している。さらにその後、左側縁へも極状剥離を施し、影刀面を作出している。ノッチは、右側縁下半に主要剥離面側からの加撃により作出されている。さらに下端部分にも、調整を施し、錐状の突出部分を作り出している。スクレイパー状の加工は左側縁に主に見られるが、石器の全体に使用によるものと考えられる微細な剥離が見られる。

台形石器

18 (366) は淀姫系黒曜石製の台形石器である。幅広の剥片を素材とし、左側縁は背面側から、右側縁は主要剥離面側から加工を施している。

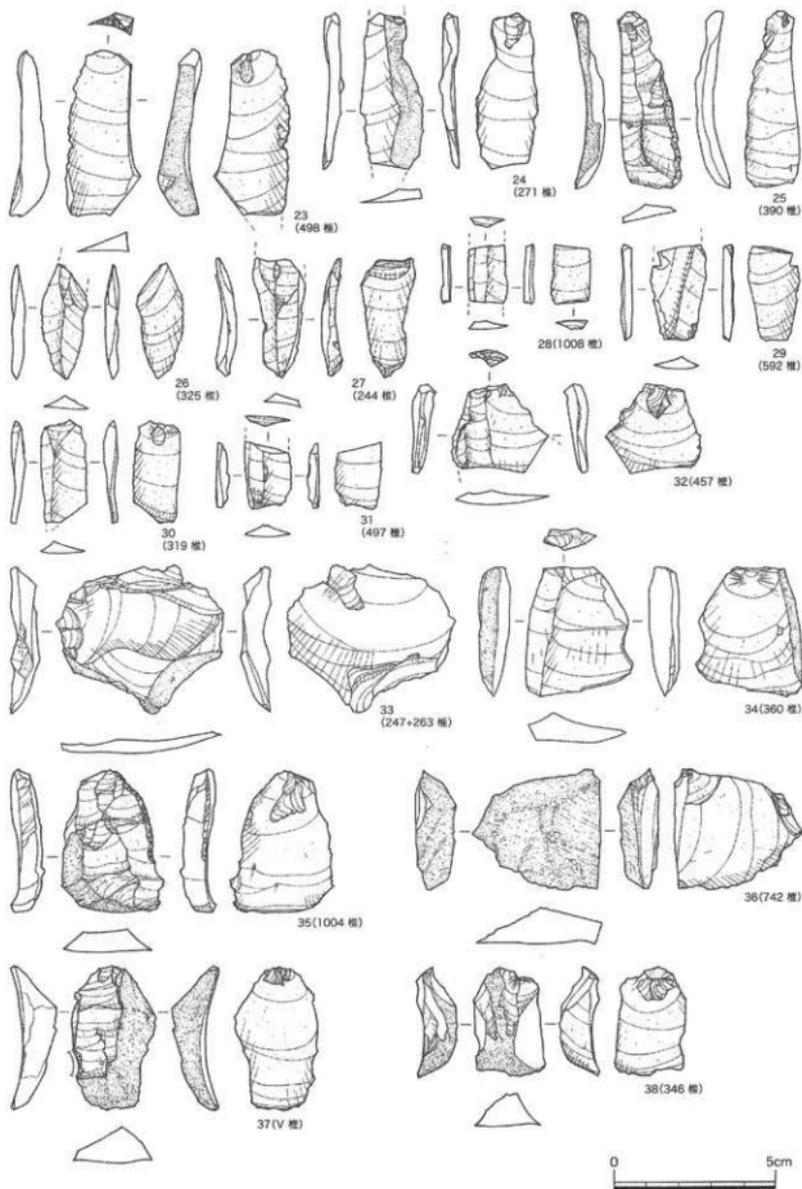
加工痕のある石器

19 (373) は腰岳系黒曜石製と考えられる加工痕のある剥片である。剥片の辺縁部に細かい加工が施されている。

20 (375) は牟田産黒曜石製の加工痕のある剥片である。礫面の形状から円礫と考えられる。上部は当時の折れにより欠損する。剥片の辺縁部に細かい加工が施されている。

21 (765) は椎葉川産黒曜石の加工痕のある剥片である。厚手の剥片を素材とし、上端から左側面に3度の剥離が見られる。右側面にも1度剥離が行われている。右側面のエッジ部分には、使用によるものか微細な剥離が見られる。素材剥片の打面部分は当時の折れである。素材剥片の上端はウートラパッセとなり厚くなっている。

22 (844) は腰岳系黒曜石製の加工痕のある剥片である。下端に残る礫面から、腰岳産の黒曜石と考えられる。背面には連続する縦長剥片剥離の痕跡が残っており、石核の作業面再生剥片を利用したものが、両側縁に細かい加工と、使用によるものか微細な剥離が見られる。



第 17 図 9 区・11 区・25 区・26 区 出土遺物②(2/3)

縦長剥片

23 (498) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。打面調整が細かく施されている。下端は当時の折れ。右側縁には礫面が残る。左側縁は使用によるものか微細な剥離が見られる。

24 (271) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。打点部分は発掘時のガジリにより欠損する。下端は当時の折れである。右側縁の大部分は発掘時のガジリである。背面には大きく礫面が残る。

25 (390) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。打面は複剥離面打面。背面には先行する剥片剥離の痕が見られ、連続する縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものである。左側面は礫面を残す。右側面は主要剥離面側からの使用によるものと思われる剥離が見られる。

26 (325) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。打点部及び上半部分は剥片剥離時にハジケて欠損している。打面を固定して連続して縦長剥片を剥離した石核から剥離されている。

27 (244) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。上半部分は当時の折れで欠損する。打面を固定して連続して縦長剥片を剥離する石核から剥離されている。

28 (1008) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。上半部下半部を欠損し、中央部のみである。意図的に折られているとも考えられる。打面を固定して連続して縦長剥片を剥離した石核から剥離されたものである。

29 (592) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。上半部は折れにより欠損している。下端は階段状剥離となっている。

30 (319) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。打面は面取りされている。打面を固定した石核から連続して剥片剥離を行っている。

31 (497) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片である。下端は蝶番剥離となっている。上半部は当時の折れで、折り取られたものか。打面を固定して連続して縦長剥片を剥離する石核から剥離されたものである。

作業面再生剥片

32 (457) は椎葉川産黒曜石製の作業面再生剥片である。打面は細かく調整されている。背面には打面を固定して連続した縦長剥片剥離の様子がみられる。下半は当時の折れである。

剥片

33 (247+263) は椎葉川産黒曜石製の剥片である。幅広の剥片で、打面部は当時の折れで欠損する。下縁には礫面が残る。

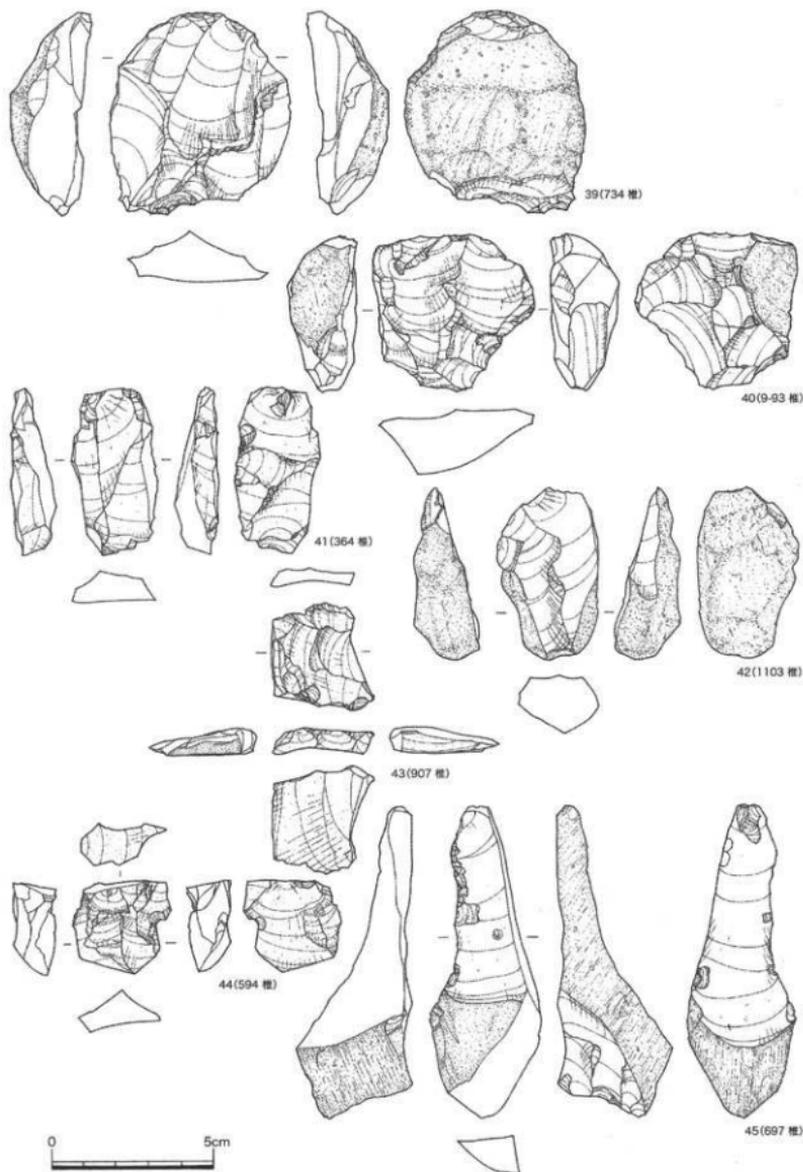
34 (360) は椎葉川産黒曜石製の剥片である。背面には先行する、2枚の剥離痕が見られ連続する縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものである。下端はヒンジフラクチャーにより厚くなっており、下端の右半分は剥離の際にハジケているようだ。左側縁には礫面が残る。

35 (1004) は椎葉川産黒曜石製の剥片である。打面は発掘時のガジリにより欠損しているが単剥離面打面のような。背面は先行する剥離痕が見られるが、階段状剥離などで、きれいな剥片は剥離できていない。右側縁には使用によるものか微細な剥離が見られる。下端と左側面には礫面が残る。

36 (742) は椎葉川産黒曜石製の剥片である。背面はすべて礫面。打面は当時の折れにより欠損している。

37 (第V層) は椎葉川産黒曜石製と考えられる剥片で、礫面を除去した際のものであろう。右側縁にノッチ状の使用痕が見られる。

38 (346) は椎葉川産黒曜石製の剥片で、礫面を除去した際のものであろう。打面は単剥離打面。



第 18 图 9 区・11 区・25 区・26 区 出土遺物③(2/3)

石核

39 (734) は椎葉川産黒曜石製の両設打面の石核である。打面調整は、やや大きな剥離で行われており、かなり急角度となっている。背面は礫面で、その形状から亜円礫素材と考えられる。

40 (93) は椎葉川産黒曜石製の石核である。やや幅広縦長剥片を剥離した石核である。打面は作業面側からの大きな剥離が施されており、剥片剥離の打角は急角度である。裏面側は一部礫面が残るが、周囲から求心状に剥離され調整されている。素材剥片剥離が終了した後、右側縁に裏面側から細かい加工が施され、鋸歯縁状となっている。

41 (364) は椎葉川産黒曜石製の両極から縦長剥片剥離を行った石核の作業面再生剥片と思われる。左側面には石核調整時の剥離と考えられる、背面側や主要剥離面側からの大きな剥離の痕跡が見られる。下端には一部礫面が見られる。再生後の剥片に、主要剥離面側に平坦剥離を施し、加工痕のある石器となっている。

42 (1103) は椎葉川産黒曜石製の小形の亜円礫を素材とした石核である。打面は作業面側からの大きめの剥離で作られており、打点部分に微細な剥離が見られるため、打面調整とも思えるが、打面部分右側のエッジ部分にも微細な剥離が見られるため、使用痕と思われる。かなり薄い剥片が剥離されている。

打面再生剥片

43 (907) は椎葉川産黒曜石製の連続して縦長剥片を剥離する石核の打面再生剥片である。石核時の打面は右方向より大き目の剥離で平坦に調整され、打点部分には作業面側から細かい調整が行われている。打面の再生は同様に右方向から行われている。右側縁は折れによって欠損している。作業面には3ヶ所の縦長剥片剥離を行った痕が確認できる。

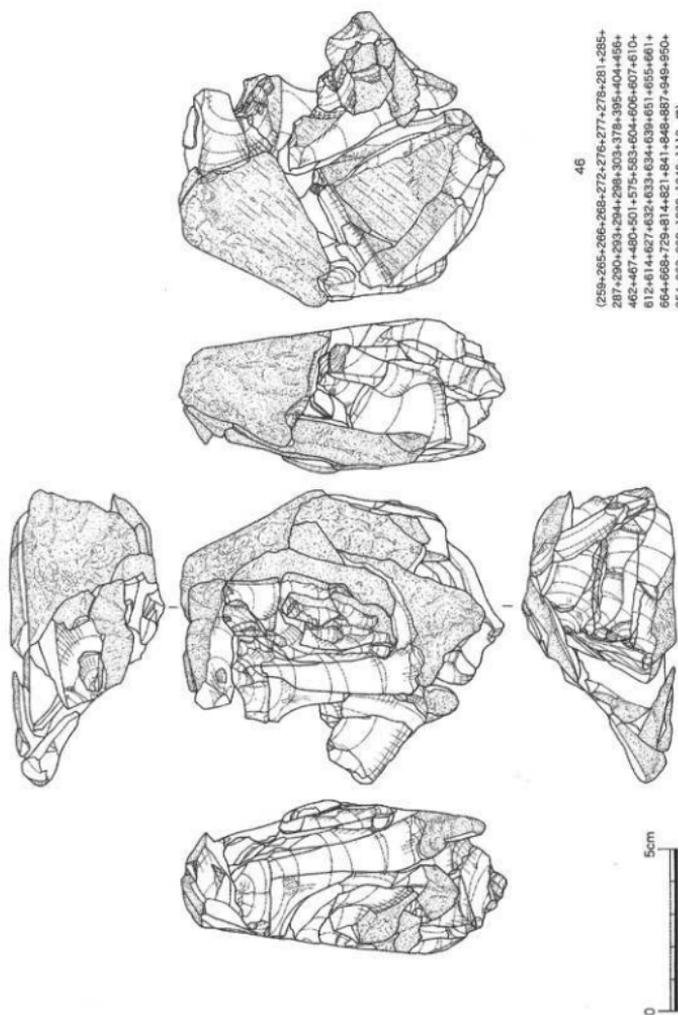
加工痕のある剥片

44 (594) は椎葉川産黒曜石製の加工痕のある剥片である。上面を打面としていた石核の作業面再生剥片を利用した加工痕のある剥片と考えられる。右側縁にノッチ状の加工が見られる。裏面は主要剥離面ではなく、素材剥片剥離後に上方からの剥離を行ったネガティブ面である。素材剥片の主要剥離面は裏面左上に残り、下方からの剥離痕が見られる。上面の打面は大きな剥離によって作出されている。背面に見られる剥離の末端は階段状剥離となっている。

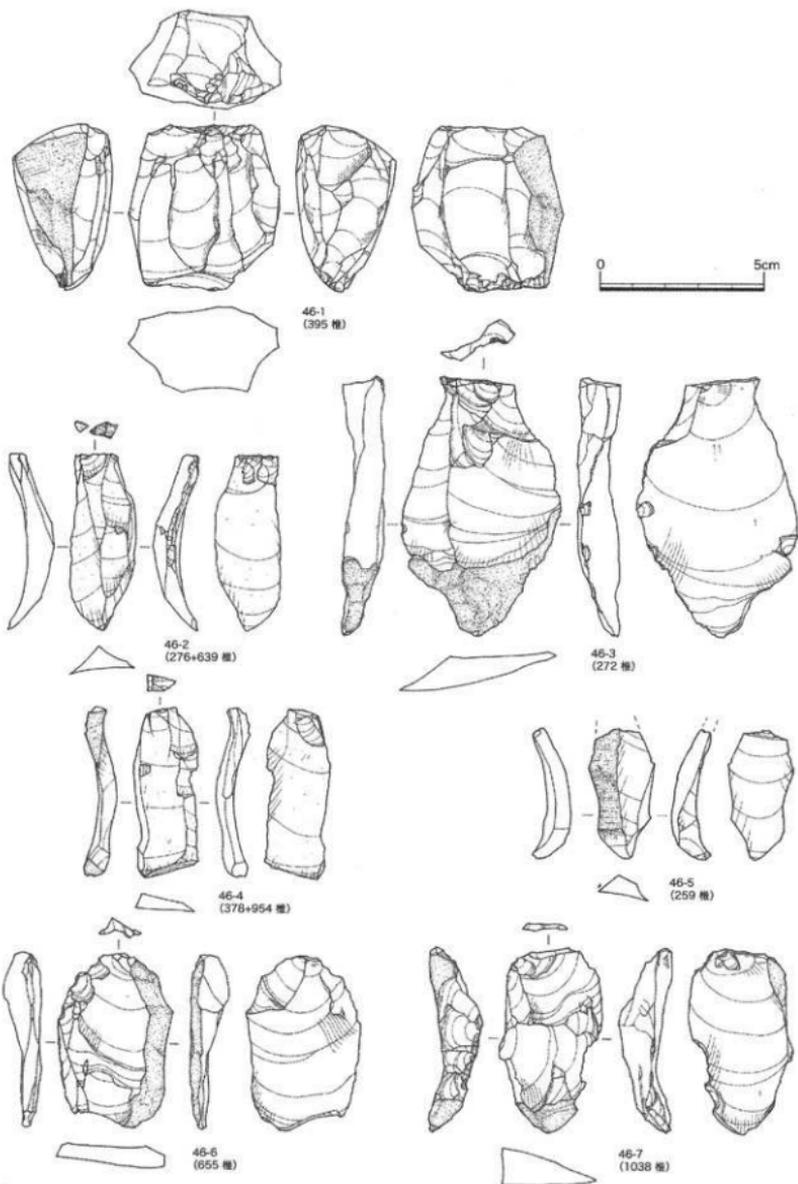
45 (697) は椎葉川産黒曜石製の加工痕のある剥片である。礫面を除去する際の剥片と考えられる。主要剥離面の下半は、ウートラパッセとなり、大きく湾曲している。下端は数度の大き目の剥離が施され、さらに細かい剥離によってやや内湾する格好となっている。左側縁には使用によるものと見られる細かい剥離が目立つ。

接合資料 1

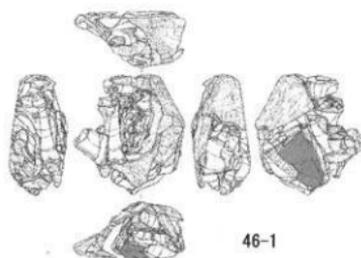
46 (259+265+266+268+272+276+277+278+281+285+287+290+293+294+298+303+378+395+404+456+462+467+480+501+575+583+604+606+607+610+612+614+627+632+633+634+639+651+655+661+664+668+729+814+821+841+848+887+949+950+954+963+968+1038+1046+1112) は椎葉川産黒曜石製の接合資料である。微細な剥片まで含めると56点が接合しており、原石の形状が分かる程度まで接合できた。接合状況は弧状に分布する石器群の西側を中心に、一部は25区のものも接合している。長さ10cmほどのやや扁平な亜円礫を素材としている。礫面の平滑な面を後ろ側とし、始めに、左側面に打面を作り、上部を左側面からの数度の剥離で除去している。その後、背面側の礫面を除去するように、上方から何度も剥離を繰り返して、縦長剥片剥離を行う石核を作り出している。作り出された石核は、最終的には、左



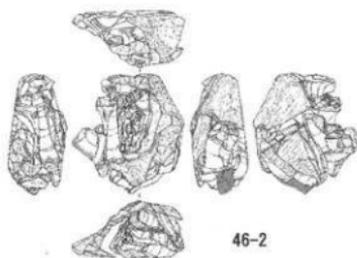
第19圖 9区・11区・25区・26区 出土遺物④ 接合資料①(2/3)



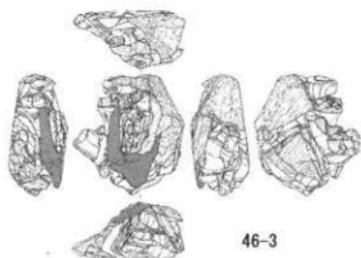
第 20 図 9 区・11 区・25 区・26 区 出土遺物⑤ 接合資料①(2/3)



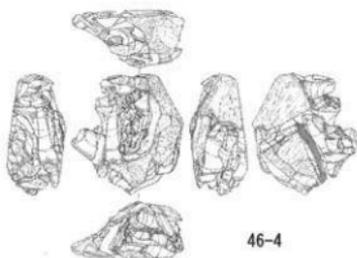
46-1



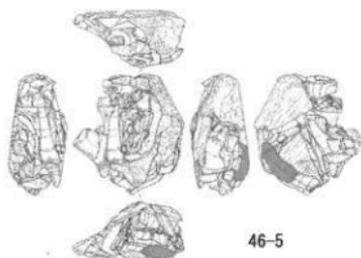
46-2



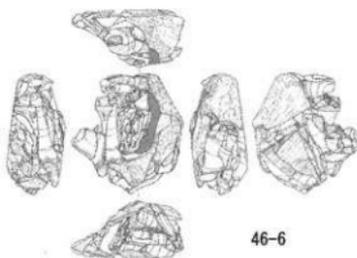
46-3



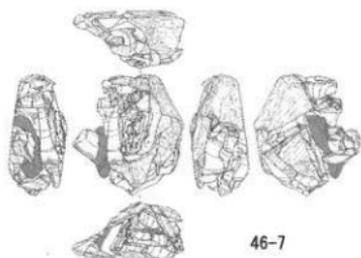
46-4



46-5



46-6



46-7

接合資料① 個別石器配置図

側面は上方から、右側縁は下端側から連続する剥片剥離を行っており、扁平な原石の形状に合わせて縦長剥片剥離を行った様子が見られる。打面再生も数度行われているようであり、多くの素材剥片を剥離している。残念ながらナイフ形石器などの製品の接合は見られなかったが、これまでに掲載した石器の中に、この石核から剥離されたものが多く含まれていると考えられる。

石核

46-1 (395) 46 の接合資料①の中の石核である。左側面の礫面が、接合資料では、後ろ側の下半部中央に見えている。正面には上方から縦長剥片剥離を行った痕跡が見られ、上面の打面は、作業面側からの調整が行われている。接合状況から打面は数度の再生が行われたことが予想される。後ろ側は、下端から縦長剥片剥離を行っており、表面と裏面で、打面を入れ替えて剥片剥離を行っている。ただし、それぞれの面では打面を固定して剥離を行っているようだ。原石の形状が、表面側と裏面側方向に扁平に広がる形となっており、原石の形状をうまく利用した石核である。

剥片

46-2 (276+639) はやや湾曲する縦長剥片で、石核裏面中央の剥離面に接合する。剥片の下端が石核上面の打面より長い為、上面の打面再生を行う前に剥離されたものである。打面は作業面側から細かく調整されている。

46-3 (272) は主要剥離面の下端が、46-1 の石核正面右側縁下端の小さな剥離面と接合する。背面には先行する礫面を除去するための剥離の跡が見られ、下端部には礫面が残っている。打面は単剥離面打面で、原石上部を剥離した剥片の主要剥離面に接合する。両側縁には微細な剥離痕が見られ、使用によるものか。

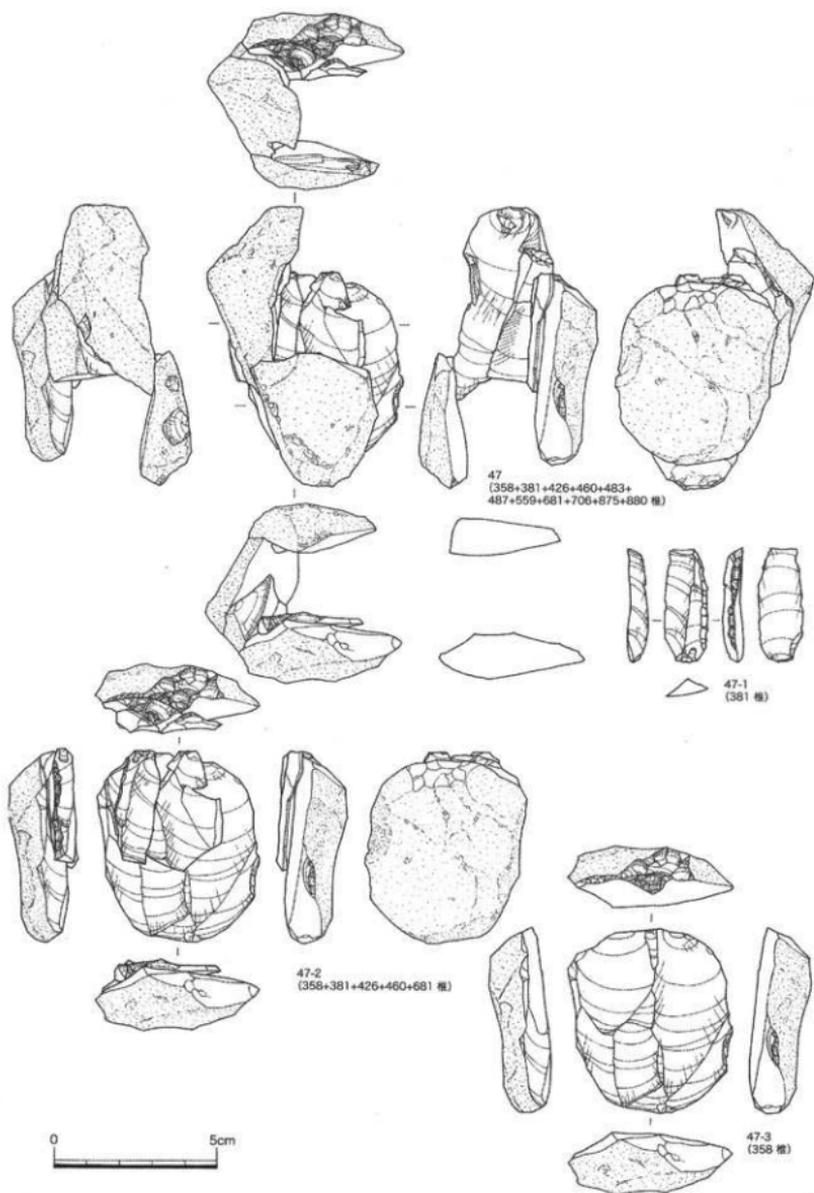
46-4 (378+954) は縦長剥片で、46-1 の石核正面の左から 2 番目の剥離面に接合する。打面は石核の打面より上位にあり、石核の最終的な打面再生前に剥離されたものである。下端は下方からの縦長剥離の際の打面を取り込んでいる。右側縁の一部に礫面が残っており、46 の接合資料後ろ側の平滑面の一部である。

46-5 (259) は 46-1 の石核の裏面右端の剥離面に接合する。46 の接合資料では裏側のもっとも左側に見える剥片である。上半部は当時の折れにより欠損する。剥片の下端は湾曲し 46-1 の石核の上面の打面よりも上位に位置し、剥片下端に見られる剥離面は、石核の先行する打面の一部である。最終的な石核の打面調整は 46-1 図では正面側からであるが、その前段階では右方向から行われていることがわかる。

加工痕のある剥片

46-6 (655) は剥片で、46-3 背面の右側に見える剥離面に接合する。打面は単剥離面打面で、原石上部を剥離した剥片の主要剥離面に接合する。左側縁の上半部分には背面側方向へ細かな加工が施され、鋸歯縁状になっている。左側縁下半部分には微細な剥離痕が見られ、使用によるものか。

46-7 (1038) は、46 の原石の上部及び正面の礫面部分を除去した後、46-1 の石核の細かい調整を行った段階の剥離面が、背面側及び左側縁に見られる。右側縁の上部と中央やや下方には、背面側からの使用によるものか、微細な剥離痕が見られ、挟入状の形状となっている。



第21图 9区・11区・25区・26区 出土遺物⑥ 接合資料②(2/3)

接合資料 2

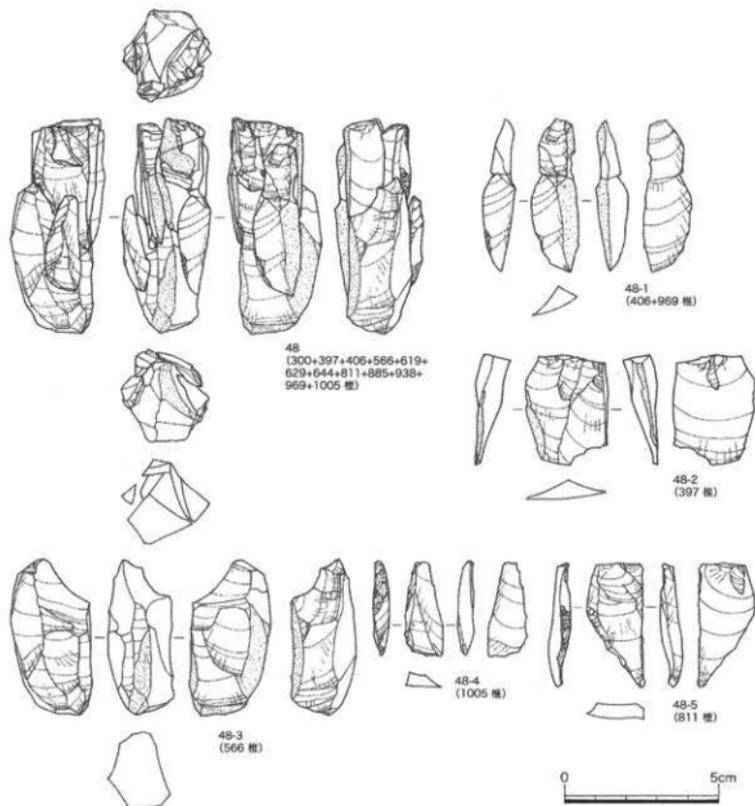
47 (358+381+426+460+483+487+559+681+706+875+880) は椎葉川産黒曜石製の連続する縦長剥片剥離を行った接合資料である。11 点の石器が接合する。拳大ほどの直角稜を素材としており、接合資料①とほぼ同サイズもしくは若干小さい原石と考えられる。正面に見られる、逆三角形の背面が礫面の剥片は、下方から剥離されており、原石からの最初の剥離と思われる。正面左側の背面が礫面の剥片が次の段階の剥離であり、石核の礫面を除去するためのものである。その後は連続的に縦長剥片剥離を行っているようだ。打面は上方に固定され、作業面側からの細かい打面調整を繰り返しながら剥片剥離を行っている。接合資料①は扁平な原石の形状を利用して、作業面を入れ替えながら、原石の両側から剥片剥離を行うように作業を行っているが、こちらは、作業面や打面が固定され、終始同様の剥片剥離が行われたものと考えられる。最終的な残核はかなり薄くなるまで剥片剥離が進んでおり、接合資料①よりも効率的に縦長剥片を剥離できたと考えられる。最終的には長さ 5 cm ほどの薄い縦長剥片を剥離しているが、当初は 7 cm 前後のものも剥離していたと考えられる。

ナイフ形石器

47-1 (381) は 1 側縁加工のナイフ形石器で、接合資料における縦長剥片剥離の後半に剥離された剥片が素材である。右側縁に主要剥離面側からのプランティング加工が施され、先端部は左側縁と同様に加工が施され、エンドスクレイパー状の形状となっている。

47-2 (358+381+426+460+681) は 47-1 のナイフ形石器の素材が剥離される直前の状況である。正面の剥離面から終始上方からの剥片剥離を行っていたことがわかる。

47-3 (358) は最終の残核で、背面左側に見える中央部までの剥離の先端が、螺旋剥離となっており、廃棄されたようである。また、右側縁の一部には裏面側からの使用によるものか細かい剥離が見られ、抉入状の形状となっている。

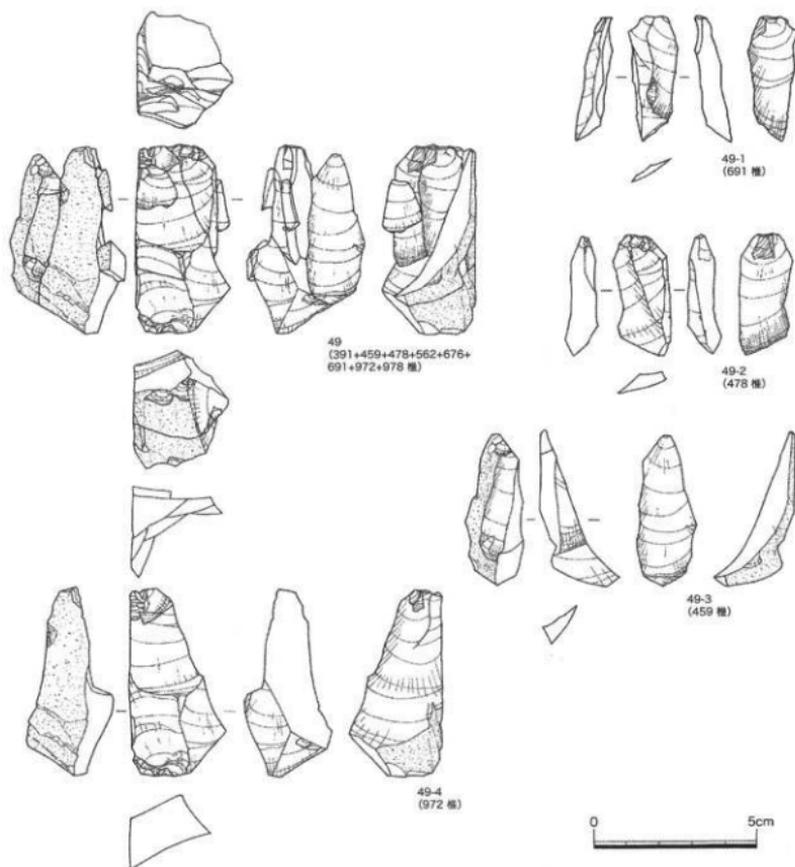


第22図 9区・11区・25区・26区 出土遺物⑦ 接合資料③(2/3)

接合資料3

48 (300+397+406+566+619+629+644+811+885+938+969+1005) は、椎葉川産黒曜石製の連続する縦長剥片剥離を行った接合資料である。12点接合。残核がなくなり小さくなるまで剥片剥離を行っている様子が伺える。打面は背面側の右上方向からと左上方向から剥離され細かい調整は見られない。正面及び右側面には稜面が見られ、当初の大きさがわからないため、憶測しかないが左側面から背面にかけて本来の作業面(正面)があった可能性もある。左側面の右端に残る剥離痕が、長さ6.5cm。左端に残る剥離痕が5.5cmを測る。左側面中央に接合するナイフ形石器の素材も、剥片剥離時には6cm程と考えられる。残核は大きくウトラパッセ状の剥離となり、剥片剥離を終えている。

48-1 (406+969)、48-2 (397) は剥片で、稜面が残っている。48-3 (566) は残核。48-4 (1005) はナイフ形石器で、左側縁上半と下端に主要剥離面側から加工が施されている。48-5 (811) は左側縁下半に主要剥離面側から加工が施されており、ナイフ形石器とも考えられるが、鋸歯状の加工となっており、削器とした。

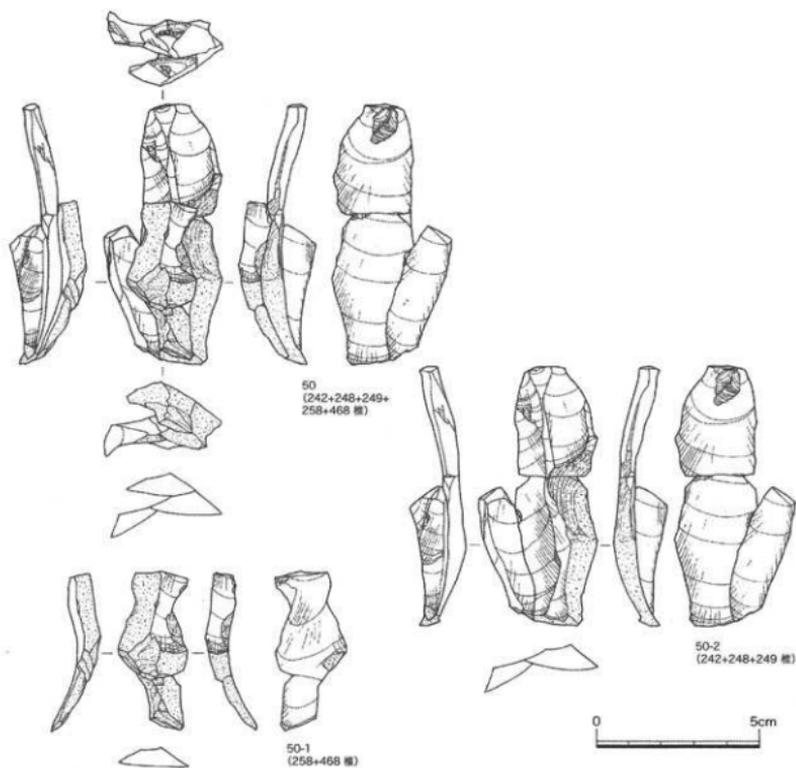


第23図 9区・11区・25区・26区 出土遺物⑧ 接合資料④(2/3)

接合資料4

49 (391+459+478+562+676+691+972+978) は、椎葉川産黒曜石製の連続して縦長剥片剥離を行った接合資料である。8点接合。当初は正面下端からの剥片剥離を行っていた様子が見られ、下端裏面側には打面調整を行った痕も見られる。その後、打面を180度反転し剥片剥離を行っている。打面は右方向からの大きな1度の剥離で形成されているようで、7点接合している内の4点の打面が残されている。剥片剥離は、階段状剥離やウートラパッセ、蝶番剥離をくり返しながら行われており、あまり良好な剥片は見られない。左側面や下端には礫面が残っている。下方から2回、打面を入れかえてから、8回の剥離を行ったことが確認できる。

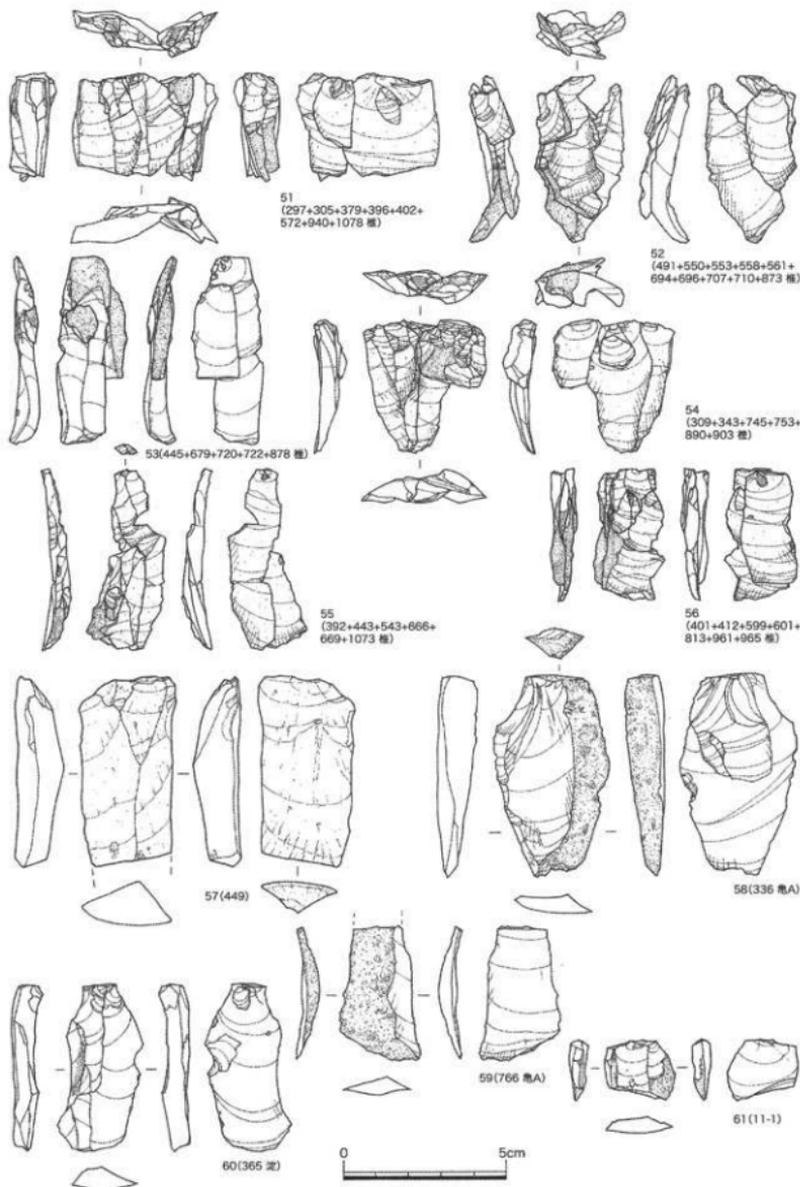
49-1 (691)、49-2 (478)、49-3 (459) は剥片であるが、大きさやその形状からナイフ等の素材剥片とはなりえなかったと考えられる。49-4 (972) は、大きくウートラパッセ状の剥離となっている。



第24図 9区・11区・25区・26区 出土遺物⑨ 接合資料⑤(2/3)

接合資料5

50 (242+248+249+258+468) は、椎葉川産黒曜石製の接合資料である。5点接合。連続する縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものである。3回の剥離で構成された接合資料である。背面に接合する剥片は石核の作業面を調整するための剥離による剥片で、背面の大部分は礫面である。上半部は欠損する。接合資料の中心は長さ8cmを測る縦長剥片で、中央部で折れている。背面下半の右半分は礫面が残る。作業面側からの丁寧な打面調整が施されている。背面尾剥離痕から、同様の縦長剥片を連続して剥離していたと考えられる。



第25图 9区·11区·25区·26区出土遺物⑩

接合資料

51 (297+305+379+396+402+572+940+1078) は椎葉川産黒曜石製の接合資料で、正面の幅広の剥片は作業面再生剥片と考えられる。上方を打面に固定して連続して縦長剥片剥離を行う石核の石核調整時の接合資料と考えられる。右側縁には一部礫面も残る。打面は作業面側からの調整が行われている。

52 (491+550+553+558+561+694+696+707+710+873) は椎葉川産黒曜石製の薄い縦長剥片の接合資料である。打面は上方に固定されており、一部は礫面打面である。石核調整の初期のものと考えられる。

53 (445+679+720+722+878) は椎葉川産黒曜石製の縦長剥片2点の接合資料である。先行する縦長剥片は中央部で折れている。背面の剥離方向は下方からとなっており、上半部に残る礫面の状況から、礫面を除去するための剥離と考えられる。

54 (309+343+745+753+890+903) は椎葉川産黒曜石製の3枚の縦長剥片の接合資料である。右端の剥片は階段状剥離により途中で折れている。打面は背面側から調整が行われているが、粗く礫面が残る部分もある。比較的初期段階の石核から剥離されたものと考えられる。

55 (392+443+543+666+669+1073) は椎葉川産黒曜石製で、打面を上方に固定した石核から連続して剥離された剥片の接合資料である。打面は作業面方向から細かく調整が行われている。

56 (401+412+599+601+813+961+965) は椎葉川産黒曜石製の4枚の薄い縦長剥片の接合資料である。左側面は礫面が残る。打面は4枚とも同じ剥離面で、打面調整は行われず、単剥離面打面である。いずれの剥片も、下端は階段状剥離や蝶番剥離となっている。

いずれの接合資料も、縦長剥片剥離の痕跡を示すもので、26区において多くの剥片剥離を行っていたことが伺える。

その他の石器

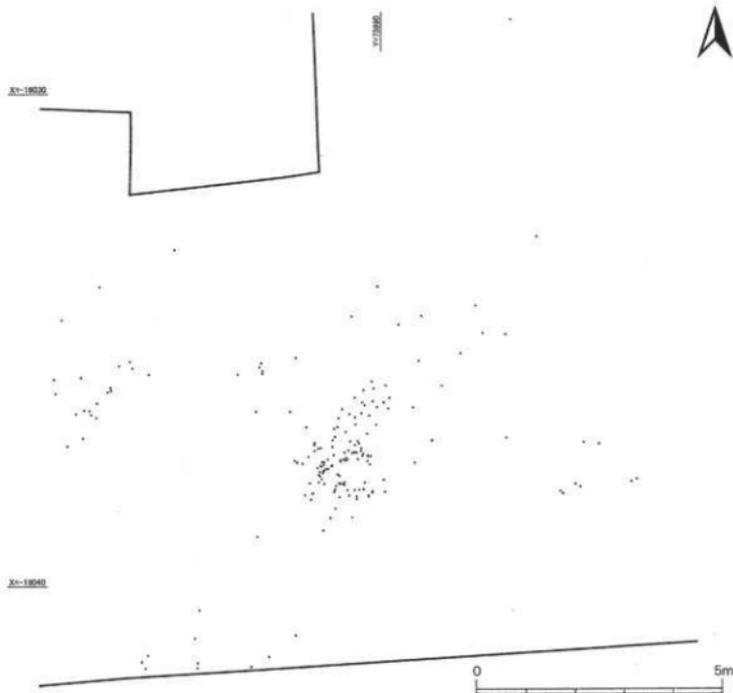
57 (449) は表面の風化が著しい頁岩製の縦長剥片である。打面を固定して連続して縦長剥片剥離を行った様子が、背面の剥離面からわかる。下端は当時の折れである。他に同様の石材は見られない。

58 (336) は亀岳系黒曜石A群製の剥片である。打面は単剥離面打面。右側面には礫面が残る。幅広の縦長剥片を連続して剥離した石核から剥離されているようだ。

59 (766) は亀岳系黒曜石A群製の剥片である。礫面を除去した時の剥片。58・59の2点の石器は第16図16のナイフ形石器と同一母岩とかがんがえられ、剥離面や礫面が酷似している。蛍光X線による産地分析では、後述する27区出土の亀岳系黒曜石A群製石器群と同じ結果となるが、質感が若干こととなっており、同じ産地ではあるが、同一母岩ではないようだ。

60 (365) は淀姫系黒曜石製の縦長剥片である。打面は単剥離面打面。連続して縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものである。下端は蝶番剥離となっている。

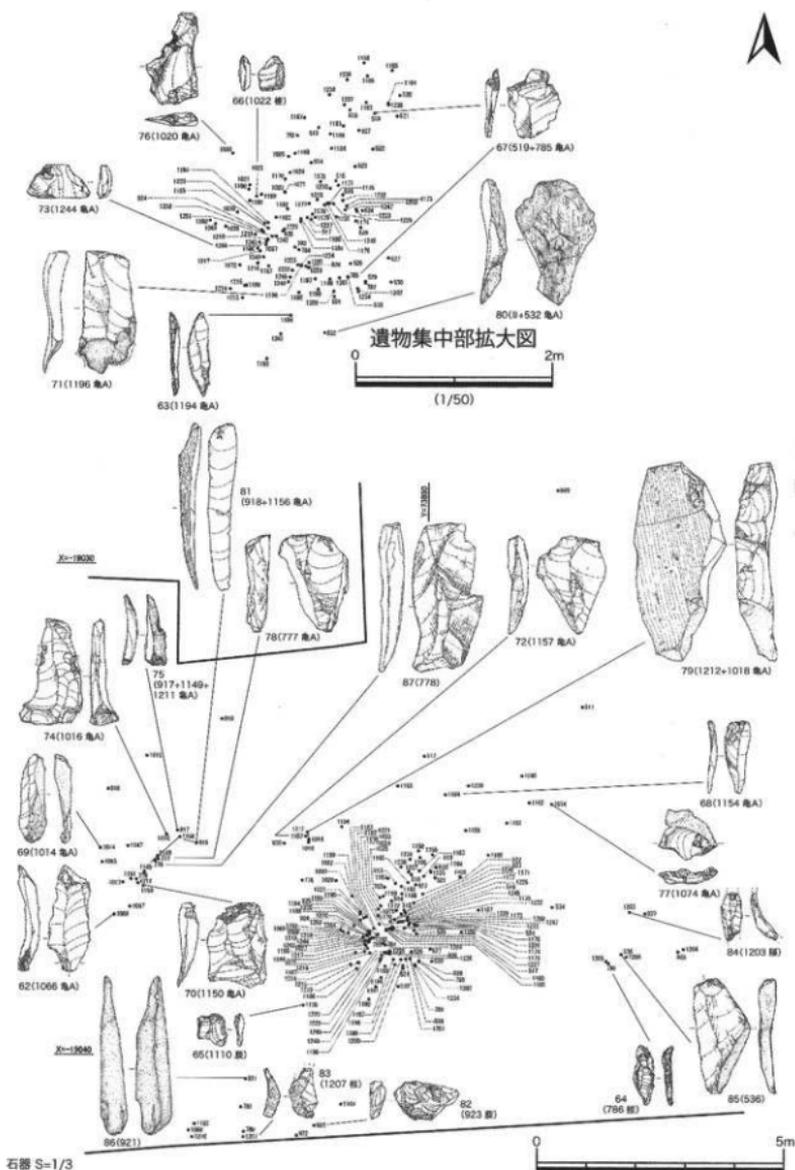
61 (11-1) は縦長剥片と考えられるが、下端は階段状剥離となり欠損する。背面には先行する剥片剥離の痕が見られ、連続する縦長剥片剥離を行っていたと考えられる。打面は作業面側から調整が行われている。石材は不明であるが、チャート系の石材である。



第26図 5区・27区 遺物出土状況①(1/100)

—27区—

188点の石器が検出されており、37点を図示している。当地区は第VI層の上面まで畑の耕作が及んでおり、一部の掲載石器は旧耕作土であるII層出土のものがある。しかしながら接合資料⑥と接合しており、本来は同一の石器群である。中央の最も石器の集中している部分は、図版13にみられる礫が中心にあり、その周りに石器が分布している。石器製作の場であったことが予想される。第VI層上層が削平されているものの、第VI層中位から石器群が検出し始めるものと考えられ、AT降灰期に近い石器群である。石器群の内容から、縦長剥片剥離に特化した様子が伺え、また、石材分析の結果188点中159点が亀岳系黒曜石A群製の石器群ということが判明している。接合資料⑥からはかなり大きな原石を搬入し剥片剥離を行っている様子が伺われる。第5章では接合資料⑥の接合状況を図示しており、中央の集中部分にそのほとんどがある。接合資料や状況や出土石器からかなり大型の縦長剥片を剥離していたものと考えられる。



第27図 5区・27区 遺物出土状況②(1/100)